

授業科目名	吹奏楽の歴史	担当形態	講義		
		開講学期	秋学期		
担当教員	上田 仁	単位	2	年次	2

＝授業のテーマ及び到達目標＝

近代から現代までの吹奏楽の歴史を辿り、演奏の目的や新しい楽器の誕生による編成の変化を学習する。現在活動中のバンドの音源を鑑賞することで、サウンドの違いを感じ、演奏家、教育者として必要な知識を体験的に深める

＝履修の条件と学習の方法＝

講義内容を理解出来る言語能力を備えていること。

授業中や映像、音源の鑑賞中は受講者全員が集中出来るように私語はしない。

授業は講義、板書、教科書や資料読解、DVD、CD鑑賞によって進める

＝授業の概要＝

吹奏楽と一言で言ってもその編成は十数人から 100 名に及ぶ。

オーケストラを弦楽器が主体の楽団と考えるならば、吹奏楽は管打楽器が主体となる楽団と言える。

管楽アンサンブルや室内楽、ジャズバンドなども吹奏楽と言えないこともないが、双方の違いは指揮者が必要か否かということになる。

吹奏楽の中にはブラスバンド（金管バンド）、シンフォニック・バンド、コンサート・バンド、ウインド・アンサンブル、ウインド・オーケストラ、マーチング・バンド、など多数の形態が含まれており、その編成や目的は様々で、昨今の日本では吹奏楽コンクールに勝つことを目的としたコンクールバンド、という呼び名も聞かれるようになった。

本講座ではブラバンや吹部（すいぶ）という愛称が付けられるまでに親しまれている吹奏楽の歴史を、どこで、だれが、なんの目的で、どのように、というポイントを押さえ、映像や音資料を使いながら体験的に学習し、昨今スクールバンドなどでささやかれている部活のあり方や、コンクール至上主義などの風潮など、日本の吹奏楽を取り巻く問題も取り上げる。

＝授業計画＝

全 15 回（14 回の講義＋試験）

- 第 1 回 ガイダンス、教科書購入の案内など
- 第 2 回 近代吹奏楽の起こり、フランス革命
- 第 3 回 フランスの吹奏楽、コンセルヴァトワール、ギャルドの発足
- 第 4 回 イギリスの吹奏楽、軍楽隊
- 第 5 回 イギリスの軍楽学校、軍楽隊
- 第 6 回 楽器の改良、ピストンシステムによる金管楽器の発展
- 第 7 回 カリスマ発明家、アドルフサクソ
- 第 8 回 サクソルン属、編成の変化
- 第 9 回 アメリカ吹奏楽 ギルモアとビジネスバンドの起こり
- 第 10 回 アメリカ吹奏楽 スーザの時代
- 第 11 回 アメリカ吹奏楽 エンターテインメントから教育へ ウインドアンサンブル
- 第 12 回 日本の吹奏楽 黒船来航から、フェントン
- 第 13 回 日本の吹奏楽 吹奏楽コンクール
- 第 14 回 現代日本の吹奏楽の問題と課題
- 第 15 回 試験

=テキスト（必携）=

必携、初回の授業で指示する。

=参考書・参考資料（必携）=

必要な場合は担当教員が準備する

=成績評価の方法と評価の基準=

出席回数と試験の点数によって判断する

=その他=